

日露学生フォーラム

平成20年度日露青年交流事業  
「日露学生フォーラム2008」

2008年11月、モスクワの南方600kmに位置するベルゴロド市のV.G.シューホフ名称ベルゴロド国立工科大学において、「日露学生フォーラム2008」が行われました。これは、2006年のモスクワ大学、2007年の北海道大学での日露学生フォーラムに続く3回目のフォーラムとして行われたものです。

ベルゴロド国立工科大学は、教育分野における国際協力の発展への寄与が認められてフォーラムの開催場所として選ばれた。

大学を挙げての歓迎ムードの中、ベルゴロド到着から出発まで、日露双方の学生による討論を中心に、市内視察、交流プログラム、スポーツプログラムなど綿密に予定が組まれ、非常に充実した滞在となりました。日本側参加者はロシア人のホスピタリティを肌で感じ、ロシアに対して持っていたイメージも大きく変化したようです。

モスクワでは、日本大使館を訪問し、齋藤大使、今村公使と懇談することができ、大使館の役割や外交官の仕事についてを伺い、質問にも丁寧に答えていただきました。また、市内視察では、8月のJC学生ミッションで来日したモスクワ大学の学生と交流して、短時間ではありましたが交流することができました。

6泊7日の滞在中、車中2泊、機中1泊という強行スケジュールでしたが、体調を崩す参加者もなく、実りの多いプログラムとなりました。

テーマ

- 全体テーマ： 「日本とロシア—未来志向の協力の発展」
- 分科会テーマ： 「環境問題(地球温暖化防止対策に果たす日露の役割)」
- 「外交問題(資源外交)」
- 「社会問題(就職問題)」

日程

11月10日(月)	午後	成田発モスクワ着
	夜	モスクワ発ベルゴロドへ移動(寝台列車)
11月11日(火)	朝	ベルゴロド着
	午前	ベルゴロド国立工科大学学長表敬、学内視察等
	午後	日露学生フォーラム開会式、全体会議
	夕方	学長主催レセプション
11月12日(水)	午前	学生フォーラム分科会
	午後	市内視察
11月13日(木)	午前	スポーツイベント
	午後	記者会見
		日露学生フォーラム総括会議、閉会式
	夜	送別会 ベルゴロド発モスクワへ移動(寝台列車)
11月14日(金)	朝	モスクワ着
	午前	在ロシア日本大使館訪問
	午後	市内視察
11月15日(土)	午前	市内視察
	午後	モスクワ発
11月16日(日)	午前	成田着、解散

10月17日

### 事前勉強会

午後、外務省に日本側参加者全員が集まり、事前勉強会を行いました。ロシア情勢や日露関係についてブリーフィングを、後、分科会別に分かれて、議論の方向性などを話し合いました。また、記念品として、“Japan-Russia Student Forum 2008”ゴ入りタオルを学生が作ることになりました。日本側参加者同士の意見交換が盛り上がり、半日では足りない様子でした。



事前勉強会の様子

11月10日(月)

### ベルゴロドへ

全員初めてのベルゴロドへ向けて成田空港を出発、モスクワ到着、入国審査など予定通りで大きな遅れや混乱はなく一安ころが、モスクワのシェレメチェボ空港からクルスク駅への移動中、モスクワ名物の渋滞に遭い、クルスク駅到着は列車出発の10分前、全員列車に乗り、荷物を積み終わったのは発車の3分前というスリルを味わいました。

各車両に車掌のおばさんがいる寝台列車では、ロシア紅茶も注文できます。2段ベッドによじ登って足を伸ばすと、長時間の疲れから、すぐに寝入る人、乗り合わせたロシア人乗客と話がはずむ人といろいろでした。翌朝、地平線から上る朝日を昇ら、ロシアの広さを実感しました。



寝台車で



寝台車

11月11日(火)

### ベルゴロド到着

ベルゴロド駅では、早朝の到着にもかかわらず、工科大の学生が大勢出迎えに来てくれていたのは感激でした。歓迎の扉中、ホテルへ向かいました。朝食には、そば粒粥(гречневая каша)、カテージチーズケーキ(творожная масса)、きのこのサラダ、ピーツサラダ、具沢山のスープ、パンケーキ、ケフィール、黒パンなどアならではのメニューが並び、大都市の大きなホテルにはない温かさがあって、夜行列車に揺られて空腹の参加者には好評でした。朝食のあと、フォーラムの会場であるV.G.シューホフ名称ベルゴロド国立工科大学へ。

V. G. シューホフ名称ベルゴロド国立工科大学

V.G.シューホフ名称ベルゴロド国立工科大学は、1957年創立。学内に建築資材、経済・経営、工学機器、建築学、IT、自動車、環境工学等の単科大学があり、工業、経済分野の人材育成が行われています。学生数は、2万3千人以上、32カ国の学留学しています。研究設備その他のインフラなど最新設備が整えられ、ロシア国内でも最も設備の整った大学のひとつです。国、英国、ドイツ、中国等の大学との協力も活発です。

大学に着くと、民族衣装を着た女子学生からロシアの伝統に従い「パンと塩」で歓迎を受け、大学創立者であるV.G.シューホフ銅像に一人ずつカーネーションを献花しました。



パンと塩でロシア風の出迎え



献花



V.G.シューホフは、19世紀半ばから20世紀前半に活躍した技術者・発明家で、世界初の石油パイプラインを作ったほか、モスクワのシャーポロフスカヤのラジオ塔、ゴム百貨店のアーケード、キエフ駅のプラットフォーム、プーシキン美術館等を設計しま

### 学長表敬



学長表敬

同時通訳ブースを備えた国際会議ができそうな教室で グリッチと懇談しました。

学長より日本から初めて受け入れた代表団として歓迎を受け、「これはヨーロッパとアジアを繋ぐ重要な役割をしている。百聞は一見に如かずという諺もあるように今回の機会を利用してロシアの生活、文化、学活など自分の目で見てほしい。この出会いが友好と相互理解につながる。」というご挨拶がありました。

### 学内視察

学内の展示博物館や研究施設、医務室などを見学しました。構内の一角にある展示博物館には、駅舎や空港ターミナル、ゴミ処理施設など建築科学生の卒業作品である模型が展示されていて参加者の興味を引いていました。実際にベルゴロド駅は、卒業生の設計で改築中とのことでした。そのほか、大学関係企業や地域住民の提供による品々が展示されており、手芸品、工芸品は販売も行っているそうです。大学自慢の展示博物館です。



学内博物館

### 植樹

フォーラム開催を記念して、キャンパス内のベルゴロドの町を見下ろす丘に記念の植樹を行いました。クリの苗木を植え、者が順番に土をかけ、水をやりました。大きく育つことを祈るのみです。





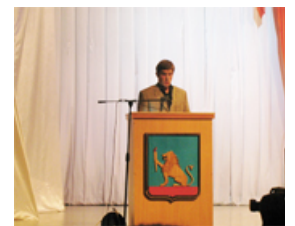
植樹の様子

### 開会式

1200人収容の文化教育センターコンサートホールは、ほぼ満席でした。グリッチン学長、日本側団長(外務省欧州局ロシア交流室 山村室長)の挨拶に続き、ベルゴロド州政府青年問題局P.N.ベスパレンコ局長からは州知事と州政府のメッセージをいただきました。日露代表の基調報告は、ステージ上方の2台のスクリーンに英文、露文併記で映し出されました。



開会式の様子



開会式

### 日本側基調報告

- 野本和宏 早稲田大学政治経済学部3年
- 児玉明子 青山学院大学国際政治経済学部4年
- 小菊菜々子 慶應義塾大学総合政策学部4年

ロシア側の基調報告「一つの情報空間」では、南アフリカで遠隔教育を研究中の同大卒業生とのライブ中継が披露され、セレモニーに続いて、学生や教員、地域の歌手、演奏家、ダンサーのコンサートによる歓迎を受けました。迫力と華やかさ本側参加者は圧倒されました。



開会式演武



開会式コンサート



### 学長主催レセプション

学内食堂で着席式の立派なレセプションが行われました。食事のあとはバンドの生演奏もあり、ダンスを楽しみました。日学生が作成したロゴ入りタオルを記念品として参加者全員に配って、交流も盛り上がりました。



レセプションの様子

11月12日(水)

### 分科会

講義棟入口で「環境問題」「外交問題」「社会問題」の分科会ごとに分かれて各会場へ移動しました。各分科会では担当教口火を切る形で、ディスカッションが行われました。

「外交問題」分科会では、ロシアの民主主義、日露のパートナーシップなどについて話し合う中で、これまでロシアに対してていたイメージが一変しました。



外交分科会



外交問題分科会の傍聴者

「社会問題」分科会では、就職問題について、日露の共通点・相違点、労働市場の需給バランス、教育機関の果たす役割などについて話し合いました。

「環境問題」分科会では、ゴミ処理、放射性廃棄物、環境教育などの問題について話し合いました。



社会分科会



## 市内視察



ジオラマ博物館

「クルスクの戦い」ジオラマ博物館と民族文化博物館を見学し、二次世界大戦時、独ソ戦の舞台となったクルスクの戦車戦のジオラマは大変な迫力がありました

民族文化博物館では、「パンと塩」で歓迎され、布と毛糸で民芸品の人形を作りました。フォークダンスのマイムマイムのよ伝統的なダンスゲームを楽しんだ後、リンゴジャム入りピロシキとけし粒入りパンでロシア式に紅茶をいただきました。



民族博物館



## ダンス・ゲームプログラム



夕食後、学内のホールでロシア側学生のリードで、ダンス&ゲームプログラムが行われました。子供に返ってダンスやゲームに興じるうちに交流が深まりました。日本側もギター伴奏で歌を披露するなど盛り上がりました。



交流の様子

11月13日(木)

## スポーツプログラム

スポーツプログラムでは、バスケットボール、バレーボール、卓球を通じて交流をしました。体育館では、ロシア側は身長190cm超級の運動部の学生が整列、観客席は応援の学生で満席でした。本格的な日露対抗

は、レクリエーションスポーツを予想していた日本側学生には、まさにハプニングでした。圧倒的な体力差にもかかわらず、日本側も大健闘しました。

勝敗はともかく、肌の触れ合う交流となったことは間違いありません。



スポーツ

### 記者会見

地元のテレビや新聞の記者が集まり、日本側代表(分科会リーダー、同行者)の記者会見が行われました。学生フォーラムでの取材と思いきや、日本についていろいろな質問が出されました。質問は日本の若い世代の関心事項や女性の果たす役若者の活字離れ、電子書籍にまでおよびました。日本に対する関心の大きさと情報の少なさが感じられました。

### 閉会式

始めに、分科会で話し合われた内容について参加者から報告がありました。







発表後、ロシア側参加者からも所感が述べられ、副学長より日露のフォーラムの参加者一人一人に表彰状が授与されま



閉会式

セレモニーの後、歌や演奏、民族舞踊、モダンダンスなどの送別コンサートが盛大に行われ、最後に舞台上で花火が上がった動的な幕切れとなりました。



送別コンサートの様子

最後に日本側が、学長夫妻を始め、大学関係者、ロシア側学生を招待してお別れの会を催し、和やかな雰囲気の中でベルゴの3日間を締めくくりました。列車の出発時間が迫る中、アドレス交換をしたり、写真を撮ったりして別れを惜しましました。



お別れ会

11月14日(金)

### モスクワ到着

早朝のクルスク駅(モスクワ)で、初日にお世話になったガイドのマリアさんと合流、市内視察へ。「赤の広場」を見学、30分自由時間となりました。国営 Gum 百貨店は今やスタイリッシュなショッピングセンターとなっていますが、裏側の階段などは昔



までノスタルジーを感じました。ソチ冬季オリンピックの公式マスコットとなったチェブラーシカを扱う店が学生に人気でした。i  
の屋根はベルゴロド国立工科大学の創始者シューホフの設計です。



Gum百貨店

### 日本大使館訪問

厳重なセキュリティーチェックを受けて、みな緊張の面持ちで大使館内部へ入りました。  
 齋藤大使は気さくに学生に接してくださり、今回のフォーラムで学んだことや今後の希望など学生の発言に耳を傾けてくださ  
 した。外交官として重要な資質として、魅力ある人間であることが大事で、外交の原点は友達を増やすことだという話には多く  
 生が共感していました。今村公使からは大使館の果たす役割についてブリーフィングしていただきました。

### 市内視察

2008年8月にJC(日本青年会議所)学生ミッションで来日したモスクワ大  
 学の学生4名が合流してくれました。雀ヶ丘、ノヴォデヴィチ修道院、アルバ  
 ート通りなど一緒に散策し、短い時間でしたが、交流の輪が広がしまし  
 た。



夕食レストラン

11月15日(土)

### 最終日

クレムリン、武器庫の見学に加えて、好奇心旺盛な学生は、ソビエト時代は2-3時間待ちだったというレーニン廟を見学しま  
 した。ガイドのマリアさんのわかりやすい説明のおかげで、ロシアの歴史にも触れることができました。5日間いたロシアともお  
 す。



クレムリンの壁



ウスペンスキー寺院

《青井標野 北海道大学工学部3年》



私にとってロシアは全てが未知の土地でしたが、このフォーラムを通じてロシアが大好きになりました。全体を通して一番心に残ったことはア人のホスピタリティです。ロシア語での説明をそつと耳元で英語してくれたり、大学についていろいろな説明をしてくれたりと大変親切に接してくれ、とても嬉しかったです。また、日本人学生も積極的行動する人ばかりでよい刺激を受けました。日露両学生の参加した会では、特に環境問題に関して日本とロシアの違いを知ることが大変勉強になりました。私の大学での専門分野は資源工学ですが、研究活動にも今回の経験を活かしたいと思います。

《下山江美 上智大学外国語学部4年》

私が今回、ロシアの地方ベルゴロドで開催された学生フォーラムに参加でき、その独特の温かいホスピタリティに接したことは、私にとってロシアを違う視点で見つめさせる大変貴重な経験となりました。学生が別れ際に涙を流しながら笑顔で手を振ってくれた感動を忘れず、将来この経験をいかす役割が自分にあることを一層強く感じました。私は今回体験したことを一人でも多くの人に伝えていきます。そして今後、両国の国民が一層日露関係に関心をもち、友好関係が強化なものになるよう心より願っています。私はこのような特別な交流の機会に恵まれたことに大変感謝しています。



《吉田崇史 東京外国語大学外国語学部3年》



ベルゴロドではまさに大学全体で私たち日本人の学生を歓迎して本当に感激しました。ベルゴロドの学生たちは本当に優しく、暖かくくれ、友情を育むことができたことを嬉しく思います。また、家に招待いただく機会があり、食べきれないほどのおいしい料理をふるまっただき、ロシアの人は本当に暖かく迎えてくれるのだと、感動しました。ロシアの人々が日本という国やその技術力、文化に好感を持っていることを大いに感じるとともに、もっと日本でもロシアへの理解・友高める必要があると強く感じました。また、モスクワでは前回のロシアの参加者が市内を案内してくれ、この交流事業の成果を改めて認識しました。

今回の経験を大いに活かし、今後も日本とロシアの相互理解・友好に役立ちたいと思います。

《宮原大輔 東京藝術大学美術学部4年》

ブドウの皮を剥いていたところ、隣のロシア人がつぶやいた。----- ねえ、それ、何してるの？  
これは私にとって衝撃的な質問であった。「皮を剥く」という私にとって至極平凡な行為が、彼女目には「大きな謎」として映る。なんでも「ロシアでは皮ごと食べるのが普通」とのこと。思いもよぬ質問に困惑した私は、「我々の伝統ですから」と答へると、相手はひとしきり笑い、納得してくれた。よほど私が「困惑顔」をしていたらしい。  
違うところで育ってきた違う者どうし。そんな人たちが集まったフォーラムでは、いろんな「違い」が転がっていて、その「違い」の数だけいろんな「発見」があった。日本人とロシア人との交流もさることながら、我々日本人メンバーどうしの交流もなかなか体験となった。いろんな大学の人たちと一挙に出会える機会というのも、よくよく考えたらそうそうあるものではない。このプログラムに関係されたあらゆる方々へ感謝いたします。ありがとうございました。

《上野聡太 明治大学法学部3年》

ロシアの方々はとても温かく私たちを迎えてくれて、彼らの胸を借りて本当に良い交流ができたと思います。フォーラムがなくても私たちはインターネットを通じて連絡を取り合っています。フォーラムという環境に身を置いたことで、良い緊張感の生活できて、怠惰になることなく濃い時間を過ごすことができました。机の上で学ぶことももちろん大切ですが、実際にその場



って体全体で感じることは、世界のことを互いに理解しなくてはならなかった現代においてとても有意義な方法だと今回のラムを通して強く感じました。

《渡辺拓也 北海道大学法学部3年》



『外交関係も結局最後は1対1の人と人との関係』。モスクワで日大使館を表敬訪問した際に、外交官のかたがおっしゃっていたのが、心から共感します。教科書やニュースから得るイメージなどは身は大きく異なる場合も多く、本当にロシアのことを知りたかったら、1の本を読むよりも1人ロシア人の友達を作って語り合ったほうが、よロシアのことを理解できるなど感じました。分科会では環境問題にて議論したのですが、ロシア人の学生のゴミや原子力発電に対する意見を聞くことができました。特に原子力発電に対する危惧の念は印象でいて、いくら科学的に安全性が証明されようとも、感情がある限りは全て理論的に動くことはできないという声には共感しました。短い

でしたが、本当にたくさんの友達を得ることができ、帰ってきてからもメールで写真を共有したり、ポストカードを贈りあったりしています。本フォーラムを通じて得た友達、思い出は一生の宝物です。

《野本和宏 早稲田大学政治経済学部3年》



モスクワで駐露大使を表敬した際に、大使が強調されていたのが、国力と個人的魅力の二つから成る」ということでした。今回訪露他の19人は、経験豊富で社会的であり個人的魅力という点では申しないメンバーでした。しかし、一方で忘れてはならない事実は、今回した日本人学生全員が高学歴であり、その中の大半が豊富な海外を持っていることです。学歴と所得の正の相関が統計的に有意であるとは言うまでもなく、海外経験も経済的基盤があればこそ得られるものです。つまり、私が今回のフォーラムを終えて感じるのには、国力と個人力という二つの独立変数が外交に影響を与えているというよりは、「→個人的魅力→外交という一連の因果関係です。

現地の学生が日本人を熱烈に歓迎してくれたことには驚きであると同時に、一つの発見でもありました。ベルゴルドが、外国来ることが少ない地方都市であることを割り引いても、日本のポップカルチャーに詳しい女子学生、日本のアニメ、ゲーム、榊の小説について夢中になって語るロシア人学生の瞳は忘れられない衝撃です。今回のフォーラムでつくづく感じたのは、ソフトパワーというものが実在していて、それが日本人と外国人(ロシア人)との距離を縮めているということです。しかし、このソフトパワーの源泉は何かというと、それは過去の世代が築き上げてきた高度な経済発展及び先端を走る科学技術ではないかいます。そもそも娯楽を享受できる中間層及び富裕層の発達がなければソフトパワー自体が生まれません。さらに、私の担った外交分科会でも再三言及されたことは、日本の持つ高度が技術(原子力、高速鉄道、資本集約型産業、ナノテク等)へのア側の期待でした。日本イコール経済力&先端技術、このようなイメージは日本国内で語られる以上に海外では強いのです。対日イメージの良さが、日本のポップカルチャーへの興味のエンジン役となっていることは容易に想像がつきます。翻実はどうかというと、日本のGDPは過去15年でほとんど成長しておらず、一人当たりGDPでもシンガポールに抜かれアジアでさえトップではありません。一部のグローバル企業のみが豊富な手元資金で研究開発を行っている状況では、技術面にお優位性も損なわれていく可能性があります。私たちが今回のフォーラムで享受できた素晴らしい歓待を20年後も日本人学生られるでしょうか。それは日本の成長力に懸かっていると思います。

《児玉明子 青山学院大学国際政治経済学部4年》

ロシアは毎回新しい驚きと感動をくれます。私は今回はじめてベルゴルドという街を訪れ、その大学生たちと交流をすることができたのですが、その街にはモスクワやサンクトペテルブルグに少なくなった「本当のロシアらしさ」というのにあふれていました。人々の際限のない温かさ、英知にあふれた若者たち、自らの街を大切にしている心、それらはまるで日本人が遠い昔に同じように持っていたものを思い出させるかのような温かいものです。私たち日本人学生は、短い期間でしたが、そういったロシアの人びとの温かい懐に触れることができ、驚き、また真の友情を育むような感動にみまわれました。帰国した今でも彼らとの連絡は続いています。このまま友情が両国の協力と発展にわずかな力、されど集まれば大きな原動力となることを心から願っています。





《横井和子 早稲田大学国際教養学部2年》



「ロシアの国章は二つ顔がある鷲で、一つはアジアにもう片方はヨーロッパに向いてるんだよ」とクレムリンにて教えられたとき、あまりにも的で鳥肌がたつ程だった。その時に思った、ロシアに来て本当に良かった。ロシアの学生と話す中で、考え方の違いや「国」の捉え方の違驚き、彼らの考え方はどこから来てるのだろうか興味を持った。その糸口がロシアの国章にある気がしたのだ。ヨーロッパとアジアの独自の存在を示すロシア。これからの時代において大役を成すアジアの魅力に一気に引き込まれた。あまりの魅力に帰ってきてから語を始めたほどである。

今回のフォーラムではロシアの地方と首都の両方を経験したこと連の名残を肌を持って感じたことなど、考えることはあまりにも多かった。ロシア訪問で私の進みたい方向が明確化したとい過言ではない。この機会を与えられたことを心から感謝し、目にしたもの感じたもの全てを存分に吸収したい。そしてこれをスタートにして更なる前進をはかるつもりだ。

《青山直樹 中央大学総合政策学部4年》

ロシア人に対して色々偏見に近いイメージがありましたが、そのいずれもいい意味で裏切られました。どちらかといえば力は苦手。陽気に踊り、そしてジョークを飛ばす。ロシア人学生と実際に触れ合うことができたのは3日間と短かったのですがかかれる際には思わず涙してしまいました。

《岡田洋平 早稲田大学法学部3年》



ベルゴロドでの三日間はとても楽しかったです。ロシア人の男はみなスガイで、話やすくとても仲良くなれました。ロシア人女性は鼻上にすていなくて日本に連れて帰りたいかったです。想像以上のおなしを受け、すばらしい経験でした。Facebookでロシア人学生と連絡っています。是非彼らには東京に来てもらってもてなしたいですし、極的にベルゴロドに遊びに行こうと思っています。

《河原哲夫 早稲田大学法学部5年》

近年、経済発展を遂げているロシアにおいて同世代のロシア人が何を考えているのか探りたいと考え、今回の日露学生フォーラムに参加しました。私が参加した外交分科会では外交に限らず、政治やお互いの国の印象などについても話し合いました。ロシアの学生がロシアの将来について熱心に語っていたのが印象的でした。また、学生の一人が「ロシアとウクライナは歴史的、文化的に深いつながりがある。将来的にはEUのように一つの経済圏を作るのが望ましい。」と言うのを聞き、ロシアの学生が自国の将来について考えていることを知ることができたと感じました。今後もロシアについて関心を深めたいと思います。



《吉良美紀 一橋大学国際・公共政策大学院2年》

このフォーラムに参加するまで、近年の資源の政治利用や南オセチア紛争をみて、私はロシアという国に対して「異質の国」の印象を持っていました。またそのような国に住むロシア人に対しても暗い、冷たいという印象を持っていました。

しかし、このフォーラムに参加して、ロシア人学生と交流する中で私のロシア人に対する考え方はがらりと変わりました。ロシア人はよくしゃべり、よく笑い、私たちを温かく歓迎してくれました。また、外交の分科会では、民主主義や言論の自由等のセンブな話についてもロシア人学生と率直に意見交換できたことは貴重な経験でした。ロシア人の民主主義の考え方等には考



られるものがあり、自分のいままで抱えてきた観念を見直すきっかけを与えてくれました。

ベルゴロドを去るときには本当に別れが惜しく、たった3日間過ごけのベルゴロドの学生との別れがこんなに寂しいものになるとは思いませんでした。私は今回築いた友情を大切にすると同時に、日露の促進のために自分にできることを考えていきたいと思います。

#### 《青井佳恵 慶應義塾大学法学部4年》

私たちがベルゴロド駅に到着するのにあわせて、ロシア人学生が駅まで迎えに来てくれたのは、うれしい驚きだった。そのすぐ隣に座ったカーリーナは、その後のレセプションや観光のとき、いつも私にロシア語から英語への通訳をしてくれた。また、の見学やレセプション、分科会、スポーツ交流など、私たち日本人が様々な体験ができるようプログラムされていて、ロシア、かさやホスピタリティー精神を、端々で感じる事ができた。私たちが帰る日の夜、ロシア人学生や先生たちが駅のホームまで来て、歌を歌いながら列車を見送ってくれたことを、私はいつまでも忘れないだろう。

今回のフォーラムに参加する前、私がロシアについて抱いていたイメージは、強い政府、ウオッカ、マトリョーシカ程度のものだった。なので、同年代のロシア人学生と直接話しかけたことが、今回のフォーラムの中で、最も興味深い経験だった。率直にて、彼らの考え方や感じ方には、日本人ととても近いと思う部分と、なかなか共感しにくい部分があった。それらの日本人と人の共通点と相違点を、直接の意見交換や体験を通して知ることができたのは、とても貴重な経験だったと思う。

#### 《岡田健一 名古屋大学法学部4年》

近くて遠い大国ロシア。ヨーロッパなのかアジアなのか、街並みはどこかアラビアさえも思わせる。日本とロシアは歴史的に日に至るまで様々な問題を含んでいることは事実である。しかしロシア人の学生たちとの交流と温かなもてなし、そして別れに流した涙の中に日露の今後の友好関係が見えた気がする。それは資源や安全保障といった戦略的な外交関係を超越えて、いの国を愛するということであろう。

所属していた環境分科会に関しても、ロシア人の環境意識の高さは予想以上であった。むしろ学校教育における環境教育度は日本よりも整っているのではないか。さらに日本の高い技術力によりロシアの資源がさらに有効活用されることで共に地球温暖化に立ち向かっていけると確信している。

私の日露交流はまだ始まったばかりである。自分に何ができるのか、それを日々模索して行動していきたい。

#### 《福田健 東京大学教養学部4年》

ホスピタリティー、今回のフォーラムはこの言葉につけるものでした。夜行列車で着いたホームにすでにロシア人学生の向かえの列があり、降りた瞬間握手の嵐にいました。そしてフォーラム中も常にロシア人学生が常に日本人学生によりそってくれ、ロシア語の説明を通訳してくれたり、大学や町の名所を案内してくれたりしてくれました。そして別れのときには大泣きしてくれるロシア人学生も…。自分も思わず涙腺がうるんでしまいました。こんなにも日本人のことをおもってくれていたんだと。

今回、私はホスピタリティーの大切さを学びました。しかし、私自身はロシア側にして挙げられたことは何一つないと思います。すべてが受けるばかりの旅、旅の終盤ではそれを恐縮にさえ感じました。この恩をこれからの日露交流につなげていくことが自らの使命であると考えています。



#### 《小菊菜々子 慶應義塾大学総合政策学部4年》

現地の人が大歓迎してくれたのが本当に嬉しかったですし、遠い国の様な存在であったロシアを肌で感じる事ができ、6日興奮の連続でした。けれども私達が訪問した大学の学生達は英語力や他にも色々な面で、議論の発展性に物足りなさを感めたのは正直あります。フォーラム以外の場の、普段の会話でもグルジアの話等、マスコミではなくロシア人の生の声から聞いたかったのですが、「あれは政府が勝手にやっている事よ」と、それ以上に話が膨らまなかつたので…もっと色々と言語としての意見を聞いたかったです。

#### 《中村友子 慶應義塾大学総合政策学部4年》



今夏、ロシアはグルジアの領土一体性を脅かしたとして米欧から、国際社会における「悪役」を演じることとなった。しかしここにロシアが先に攻め入ったとするグルジアの主張の正当性に疑問を抱いた情報が出てきたと報じられている。

フォーラムに参加して実感したのは、私は日頃、いかに色眼鏡でロシアを見ているのかということであった。グルジア侵攻に関してもアを悪とするフレームワークに疑問を呈さず、それに則って問題を解こうとしていた。今回接したロシア人学生たちの溢れんばかりのホリテューと無邪気で健気な様に驚き、感銘を受けたのもまた、ロシアに対するステレオタイプで否定的な見解を鵜呑みにしていたためか

い。

約1週間滞在してなお、いや、むしろより一層、ロシアは捉えどころのない国だと思う。しかしながら、わずか1週間で、色をはずすには十分に有益で興味深い経験をさせていただいた。ロシアは、ある意味でとても人間らしい魅力に溢れた国だっ

#### 《李凌観 東京大学法学部4年》

ロシアに対する事前知識も満足に入れられずにスタートした本フォーラム。事前にみんなで固めた議論の土台が通用するコミュニケーションが難しく図れるか、そんな緊張とワクワク感で飛行機の時間はあっという間だった。列車の旅も経ていざ、面。相手の積極さと包み込まれるような熱気に圧倒された。ロシア学生が熱心に日本学生に話しかけ、互いに英語に苦労ながらも体全体で伝えようとしてくる。このフォーラムが相手にとってどれだけ大事か、そして自分も全力で相手にぶつからなくてはならないことがはっきりと分かった瞬間だった。政治よりも社会環境、身近な質問を数多くなげかけられた。その中で日本の国会におけるイメージが少しずつ露わになり、ロシア人学生の今の関心が垣間見れる。国際情勢を頭に入れて俯瞰するロシア大事だが、このように生の刺激を得、肌感覚でロシアを知るはこのフォーラムならではの体験だと思う。

